

# アクティブラーニングとしての部活動運営

田辺 英一郎、加田 謙一郎

## A model of club activity management in a form of active learning

Eiichiro TANABE and Kenichiro KADA

(Received on Jan. 29, 2016)

### Abstract

We propose a model of club activity management that is satisfactory both to teachers and students at national colleges or Kosen. Recently Kosen has been changing drastically in various ways and the workload for Kosen teachers is much heavier than before. This makes it more challenging for them to have enough time for extracurricular activity instructions. As for Kosen students, there seem to be many who hesitate to take part in the so-called traditional club activities. We show that our practice, which subsequently aims to take a form of active learning, can deal with such a situation effectively.

キーワード：高専の現状、部活動運営、アクティブラーニング

### 1 はじめに

本稿は、本校の学生の現状に沿い、教育活動としての役目を果たし、かつ顧問教員にもできるだけ無理のない部活動運営を紹介する。続いて、この運営を土台とする、アクティブラーニングを部活動に取り入れた新たな試みについて述べる。

### 2 課外活動をどのように捉えるのか

今日の高等専門学校における課外活動教育の有りようを、どのように捉えるのか。この件は、当然、学生の立場から考える有りようと、教職員の立場から考える有りようの、両面より考えなくてはならない。高等専門学校における学生の課外活動が、学生生活の重要な一面を担っていることは自明の理である。例えば、本校のホームページ<sup>1)</sup>において、クラブ活動は、「楽しいキャンパスライフ 青春を燃やせクラブ活動」というキャッチコピーで奨励されている。また、本校が考えるクラブ活動奨励の根拠を、

「クラブ活動は、友情を育て、心身を鍛え、豊かな人間性を養う上で大切なものです。」という一文で訴えている。このような認識は、高等専門学校の多くの学生と教職員にも、十分に根付いていると思われる。

ところで、運動部への学生の入部状況に関して、本校においては近年、微妙な変化が起きている。それは運動部全般への入部者数が、その時々において変動は見られるが、減少傾向にあるということである。これは一概には言えないことであるが、学生の気質の変化が、多大に影響しているとも考えられる。

一例を挙げれば、中学校でのその種目の経験者が、高専入学後に、その種目の部活に入部しない者が増えている、ということがある。「中学校で燃え尽きた」、という発言をしばしば耳にする。また、入部しない理由に、中学校での練習によって身体を壊したことを挙げる者も、数多くいるのも事実である。さらに、運動が苦手な学生の受け皿になるような、運動クラブがなかったことも事実である。

以上、例に挙げたケースに当てはまる学生も、「友情を育て、心身を鍛え、豊かな人間性を養う」場としての課外活動は、必要であるはずだ。

また、今日の国立高等専門学校が、高専制度創立50周年を機に、「進化する高専」を標榜し、「創造力と実践力、イノベーションの創出、地域連携、国際交流、科学技術創造立国の一翼を担う感性と創造性が豊かな実践的技術者を育成」をその存在意義として明確に打ち出している<sup>2)</sup>ことも課外活動教育に関して、少なからぬ影響を与えていることは事実である。近年、20年前には考えも浮かばなかった激動が、教職員を襲っている。

一般の社会情勢においても、20年前の未成熟な社会で通用していた事柄が、現在では通用しなくなっているのである。それは高等専門学校でも同様であり、「進化する高専」には、20年前に比べて、新しい仕事が激増している。その渦中で、課外活動教育の運営だけが従来型であることには、組織的にも、それを支える教職員個人にも、またそれに所属する学生たちにも、大きな負担がかかり過ぎている。

以上、見てきた通り、課外活動教育の運営を、学生のためにも、教職員のためにも、真摯に考えなくてはならない時代に突入していると言えよう。

### 3 筆者たちが顧問をする部活動について

筆者たちは、本校のハンドボール部の顧問をしている。ハンドボール競技は、本校が位置する山形県庄内地方ではマイナーなスポーツであると言える。庄内地方にはハンドボール協会がなく、スポ小や社会人のハンドボールチーム、さらに中学校や高等学校のハンドボール部も存在しない。そういった意味で、鶴岡高専ハンドボール部は、本校の運動部の中では、やや特殊なクラブであると言える。

上記の事情より、本校ハンドボール部には、前節で触れた中学校で燃え尽きた学生、中学校での練習によって身体を壊した学生、さらに運動が苦手な学生が、数多く入部する傾向がある。

練習試合をしようにも、相手をしてくださるチームが、庄内地方には存在しないのだ。ゆえに、他の運動部の多くが各種大会での優勝を目標とする中、ハンドボール部には、「純粋に運動を楽しむとことが、クラブ活動の目的である」という認識が自然に定着しているのである。参加する公式試合は、年に1度の東北地区高専体育大会だけである。これは全国的にも珍しい現象かと思われる。

顧問について言えば、二人とも、ハンドボールは全く未経験のスポーツである。また、二人とも、いわゆる「体育会系」の対極にあるようなタイプの教

員である。しかし筆者たちは、非「体育会系」顧問だからこそ、運動部運営の中で気づくこと、考えつくこと、そして実行できることがあるのではないかと、思って、日々、部活動運営に向き合っている。

### 4 運営の実態

2007年4月、加田が顧問に就任した際、残念ながら、部の運営は学生任せの、いい加減なものと言わざるを得ない状況であった。最上級生が自由気ままに振る舞い、練習こそ熱心ではあったが、部費の管理や下級生への引き継ぎはなかった。そこで加田は、以下の点をミーティングで語り、学生の上承を得て、実行した。

- ① 練習は月～木とする。また体育館を使用できる夜練習は週に1度(木)、必ず顧問立ち会いの下に行う。
- ② 上級生は、練習プランを顧問と下級生に諮ること。
- ③ 部費の管理はマネージャーと顧問が行うこと。
- ④ 安全第一、楽しく、無理なく、活動する。

①は、部員の大半が山形県内陸地方出身者であったため、金曜日から日曜日にかけては、帰省する者が多く、練習が半端になるため、部活動は基本的に行わないことにした。その上で、チーム育成の観点から月曜日から木曜日までは、しっかりと練習に参加することを呼びかけることにした結果である。

また、体育館での練習は18:30～20:30という夜練習の時間帯に行うので、怪我等の緊急時に対応するため、顧問は必ず立ち会うことにした。2007、2008年度は加田1人が必ず立ち会った。

②は、上級生が自分たち中心で練習をしていたため、下級生が上達しない、また「面白くない」との声があったことによる。練習プラン作成に下級生も加わるようにしたことで、練習内容にもアップ等の基本的な練習メニューが増え、下級生の不満は漸次減少し、練習時の雰囲気も次第に明るくなっていった。

③は、部活動運営上、当たり前のことであるが、加田就任前には、極めて不透明であったため改善した。2010年度にはハンドボール部専用の預金口座を開き、部費の管理に活用している。

④は、「中学校の部活動で燃え尽きた学生や身体を壊した学生、また運動が苦手な学生でも、楽しくスポーツに参加して欲しい」という顧問の願いを、学

生へ明言し、学生と顧問が一丸となる雰囲気作りの必要を感じ、加えたルールである。スポーツでのみ発散できるストレスも、確実にある。上記のような学生の「受け皿」となるクラブを作り、より多くの学生に資することを願ったのである。

2009年度に田辺が顧問に加わってからは、さらに次のような運営方針を定めた。

- ⑤ 夜練習のための体育館使用を週1度から週2度にする。
- ⑥ 本校専攻科に進学する部員に、学内コーチを依頼し、より計画的かつ継続的なチーム運営を目指す。
- ⑦ ミーティングの充実を図り、部活動に関する共通認識を持つことを促す。
- ⑧ 楽しく活動することと、学生としての規律の両立を図る。信賞必罰を旨とし、クラブ内の問題行動等はクラブ全員で考える機会を持つ。
- ⑨ 入退部を希望する者は、必ず2人の顧問教員の教員室に行き、その旨を申し出る。
- ⑩ マネージャーは、月ごとの出欠表を顧問教員に提出する。
- ⑪ 他の運動部との兼部は禁止する。

⑤は当時の本校体育部長が、本クラブの熱心な活動を認めて下さり、週1度の体育館使用を週2度に増やして下さった、という経緯による。練習日は従来の木曜日と、月曜日もしくは火曜日とした。顧問立ち会いの下で行うことは従来通りである。原則として、月曜日もしくは火曜日は田辺が担当し、木曜日は加田が立ち会いを担当している。諸般の事情により最後まで立ち会えないときも、急な事態に必ず対応できるよう、顧問のいずれかは、夜練習時間帯には、必ず校内にしていることにしている。

⑥は、専攻科に進学する部員が毎年少なくとも1人はいる、という部員の専攻科進学傾向を利用している。2009～2015年度の7年間で、専攻科生が学内コーチを担当しなかったのは、2014年度の1年間だけである。現コーチは専攻科1年生なので、来年度もコーチを留任する予定である。専攻科生コーチは、元部員ということもあり、顧問とも現部員とも気兼ねなく十分な意思疎通が図れるので、計画的かつ継続的チーム運営の上で頼るところ大である。

⑦のミーティングを、筆者たちの部においては、非常に大切なこととして捉えている。定期的なミーティングは、年度初め、東北高専大会遠征前、および遠征後の練習開始前に行っている。ミーティングは、いつも練習する場所とは違うところに一同が会

するいわば非日常的な場なので、普段にはない独特の緊張感がある。だからこそ、顧問の方針をしっかりと伝えて、共通認識を持たせる上でとても大切である。

⑧の楽しい活動と規律の両立は、ミーティングの最中はもちろん、普段から部員に繰り返し指導していることである。筆者たちは、楽しい部活動を目指す一方で、「部活動は決して単なるレクリエーションの場ではない」ことも認識している。また、部活動中だけではなく、部活動以外の場で問題行動があった場合も、必要に応じて緊急のミーティングを開き、これについて部員全員に考えてもらうことにしている。「ハンド部はゆるい部活だが、他の部にはない厳しいところもある」は、顧問が部員によく言う言葉である。

⑨は、いわゆる幽霊部員をなくし、一定の規律を保つための方針である。部員なのかそうでないのか、はっきりしない者がいると、活動にけじめがなくなり、士気が落ち、部の結束も弱まる傾向がある。一方、退部したい者を引き留めることは、原則的にはしないので、退部希望者は率直にその旨を顧問教員に伝えればよいことにしている。入部希望者に対しては、顧問の教員室に来て入部希望を申し出るよう指導している。入部・退部という大きなけじめをつけるためには、少し大げさかもしれないが、あえて教員室に来てもらう方がよいと考えるからである。2年生以上の入部を継続する部員も、同じくけじめをつけるという意味で、年度初めに改めて入部届を提出するよう指導している。

⑩は、「顧問が部員の出欠状況を把握するのは当然」という考えから、3年ほど前から実施している。本稿の最後の掲載した資料1がこの実例である。出欠が練習のたびに取られていること、そしてこれを顧問が把握していることは、もちろん部員も承知している。出欠を毎回取ることが、練習への参加率を上げることに役立っているかどうかは、厳密には不明である。しかし、ハンドボール部の活動にはきちんとした方針があることを、部員に認識させる上では役立っていると考えている。

⑪は、ハンドボール部員としてアイデンティティをしっかりと持たせ、部の結束を保つための方針である。ハンドボール部は、他の運動部に比べると活動日数が少ないので、他の運動部との兼部もしやすいように思われがちである。しかし、活動日数が少ないからこそ、「自分たちは他ならぬハンドボール部員であり、自分たちは一つなんだ」、という気持ちを持ち続けてもらいたいと思っている。人数不足を補

う臨時選手として、回数限定で他の運動部の試合に出場することも禁止である。

以上のような形をとることで、学生の現状に沿いながらも一定の秩序とけじめのある、そして非「体育会系」顧問にとっても無理のない運営が可能となった。ここ数年で特に目立つ傾向は、何と云っても、次のように多くの部員数を維持していることである。人数は、それぞれの年度の5月、6月もしくは7月時点のものである。カッコはマネージャーの人数を表している。

2012年度	31 (3)	2013年度	36 (3)
2014年度	39 (4)	2015年度	40 (3)

この数字は、筆者たちの部活動が、上で述べたような中学校で燃え尽きた学生、身体を壊した学生、あるいは運動が苦手な学生の要望に十分に応えていることを示している、と言える。ちなみに、本年度は手違いにより、毎年恒例の入学時における「部活紹介」に参加できなかったが、入部した1年生は計10名である。よい意味でのハンドボール部の噂も、本校全体に広まっているようだ。一方、人数が増えること自体は喜ばしいことだが、公式戦のベンチに入れるのは17名（うちマネージャー1名）である。試合に出られない部員の方が多いという厳しい現実もある。しかし、筆者たちは「試合に出られない部員も大切な部員である」と考え、勝利だけを狙うよりは、普段の練習をしっかりと楽しんでもらうことを重視している。昨年度からの部のモットーは「明るく、楽しく、元氣よく」である。

## 5 アクティブラーニングを目指して

筆者たちの部活運営は、①燃え尽きた学生や運動が苦手な学生にも楽しく安全にスポーツをする機会を与え、②規律正しくけじめある集団行動を学ばせ、③顧問教員への負担も抑えている、という意味でひとまず成功したと言える。しかし筆者たちは、後は現状を維持すればよい、などとは決して思っていない。次に目指すのは、「アクティブラーニング」としての部活動運営である。

アクティブラーニングは、今や、大学・高専をはじめとする、日本の多くの教育機関で重視されている学習形態である。一方、高専では通常、「アクティブラーニングは、課外活動ではなく正課教育の中で行うもの」と思われる傾向が強いようだ。しかし、

社会の一員として生きていく上で必要なことを、正課教育のみで、そのすべてが学べるわけでは決してでない。課外活動だからこそ学べることもあるはずである。

また、アクティブラーニングの視点を課外活動に取り入れることで、これに不慣れな、特に新1年生が抱く、主体的な学習への抵抗感を軽くすることもできると思われる。部活運営にアクティブラーニングを取り入れることは、単に部活動への直接的効果のみならず、正課教育への間接的な効果も十分に期待できる、高等教育機関にとって意義深いものだと筆者たちは考える。

今年度(2015年度)10月より、マネージャーを除く部員全員に、自分のポートフォリオを書かせ、キャプテンを通して顧問に提出させている。ポートフォリオは、①今週の目標、②现阶段の自分の点数(10点満点)、③点数を上げるためにやるべきこと、④曜日ごとの出欠、意識して取り組んだこと、⑤今週を振り返って、の七項目からなる。本稿の最後に掲載した資料3がこの実例である。この実例は2週間分しか挙げられていないが、実際のポートフォリオは、裏表併せて1ヶ月分記録できるようになっている。書くべき量は、②の点数と⑤の出欠はもちろんだ、他の項目においても決して多くはない。また、部員には「本当のことを正直に書くように」と指導している。無理なく、見栄を張ることなく、自分を見つめ続けることこそが大切だと考えるからである。実際、提出されたポートフォリオの中身を見ると、自分が思ったことをそのまま書いている者が多いようだ。さらに喜ばしいことには、部員でありながらこれを提出しなかった者は（提出免除のマネージャーを除いて）これまで一人もいない。

ポートフォリオは、それを記すこと自体は簡単なことあるが、①～⑦を言葉に表すことで、部活動へ自分がどう関わっていったらよいか自ら考え、そしてこれを実行する指針となる。自ら考え、実行するというのはまさにアクティブラーニングの精神そのものである。ポートフォリオを書かせなくても、部活動を続けていく中で、何らかの目標設定や、それなりの反省もあるかもしれない。しかし、言葉に表しこれを記録しなければ、考えも感情も整理できず、目標設定も反省もそのとき限りのものになりかねない。結局何も変わることなく、ただ何となく日々練習をこなすだけでは、本当の意味での「楽しい」部活にはならないだろう。

## 6 まとめ

アクティブラーニングを取り入れるという試みは、現時点ではまだ模索の段階である。個人のレベルでのアクティブラーニングは進みつつあると思うが、部全体のレベルでのアクティブラーニングはこれからである。そもそもハンドボールは集団競技であるから、個人レベルのアクティブラーニングのみでは不十分だろう。どうしたらこれまで以上に「明るく楽しい元気のある」部活になるかを、キャプテンを中心に部員全体で考え、そして自分たちで実行することが今後は求められる。そのために顧問は具体的に何をしたらよいか、これは筆者たちにとって大きな課題である。

### 注

- 1) <http://www.tsuruoka-nct.ac.jp/gakusei/taiiku-bunka/> 平成 28 年 1 月 29 日現在
- 2) <http://kosen-k.go.jp/50th/index.html> 平成 28 年 1 月 29 日現在

資料 1 (11 月の出欠表) 網掛け表示は夜練習

氏名は記号表記	出席率	11月2日	11月4日	11月5日	11月9日	11月10日	11月11日	11月12日	11月30日
4A	100	○	○	○					○
4B	100	○	○	○					○
4C	100	○	○	○					○
4D	25	○	x	x					x
4E	25	○	x	x					x
4F	0	x	x	x					x
4G	0	x	x	x					x
4H	75	○	x	○					○
4I	25	○	x	x					x
3A	37.5	x	x	x	○	○	x	○	x
3B	75	x	○	x	○	○	○	○	○
3C	75	x	x	○	○	○	○	○	○
3E	50	x	x	x	○	○	○	○	x
3D	50	x	x	x	○	○	○	○	x
3F	37.5	x	x	x	○	○	○	x	x
3G	50	○	x	x	x	○	x	○	○
3H	87.5	○	x	○	○	○	○	○	○
3I	37.5	○	x	x	○	x	x	x	○
3J	37.5	x	○	x	x	○	x	x	○
3K	62.5	x	○	x	x	○	○	○	○
2A	87.5	○	○	○	x	○	○	○	○
2B	50	x	○	○	x	○	x	○	x
2C	75	○	○	○	x	○	x	○	○
2D	50	○	○	○	x	○	x	x	○
2E	75	x	○	○	x	○	○	○	○
1A	87.5	x	○	○	○	○	○	○	○
1B	0	x	x	x	x	x	x	x	x
1C	37.5	○	○	x	x	○	x	x	x
1D	37.5	x	x	○	○	○	x	x	x
1E	12.5	x	x	x	○	x	x	x	x
1F	0	x	x	x	x	x	x	x	x
1G	87.5	x	○	○	○	○	○	○	○
1H	75	○	x	○	○	○	x	○	○
1I	62.5	○	○	○	○	○	x	x	x
1J	100	○	○	○	○	○	○	○	○
2Fマ	87.5	○	○	○	x	○	○	○	○
2Gマ	100	○	○	○	○	○	○	○	○
2Hマ	100	○	○	○	○	○	○	○	○

資料2 (ポートフォリオ) クラス、氏名は割愛

12月

クラス: \_\_\_\_\_ 名前: \_\_\_\_\_

●今週の目標

体力を戻す。

～現段階での自分の点数 (10満点・より良いプレーを目指して)～

4点

点数をあげるためには…基礎的なトレーニングをしっかりとやる。

日付	曜日	出席(O, X)	意識して取り組んだこと
11/30	月曜日	O	けかをしない。
12/1	火曜日	O	体幹トレーニング
2	水曜日	X	電気工事士実技試験の講習会のため。
3	木曜日		

●今週を振り返って

体力が落ちていると感じた。

●今週の目標

体力をつける。

～現段階での自分の点数 (10満点・より良いプレーを目指して)～

4点

点数をあげるためには…基礎的なトレーニングをしっかりとやる。

日付	曜日	出席(O, X)	意識して取り組んだこと
7	月曜日	O	シュートをコースに投げる。
8	火曜日	X	連絡協議会があったため。
9	水曜日	O	体幹トレーニング
10	木曜日		寮生体育大会のため。

●今週を振り返って

基礎トレをしっかりとできた。